

巻 頭 言

昨年度から新たなメンバー構成と目標設定により再構築された関西学院大学先端社会研究所の、今年度の研究成果の一つとして、この『先端社会研究所紀要』を刊行する。

2016年度より開始された研究目標は「文化的多様性を尊重する社会の構築をめざした、社会調査を基軸とする先端的な学術研究」であった。今年度は、この目標を実現すべく、活動をより具体的に展開、深化させてきた。

昨年度に始まった「食研究班（代表 鈴木謙介）」、「ソーシャル・ディスアドバンテージ班（代表 三浦耕吉郎）」、「文化表象班（代表 鳥羽美鈴）」、「データアーカイブ研究部門・現代日本文化研究班（代表 奥野卓司）」の各研究班では、それぞれ国内外での共同研究・調査活動を積極的に展開している。その成果は、先端研が今年度、開催してきたセミナーやワークショップ、シンポジウムなど、また各研究メンバーによる学会などでの報告、学外での講演などによっても社会に発信されている。

この研究紀要もまたその一環であるが、本研究所全体の一年間の成果を活字として残すという意味で、それ以外の公表手段とは別の重さをもっていると言えよう。なかでも、今年度の紀要では、とくに一定の総括ができる段階に入った、ソーシャル・ディスアドバンテージ班とデータアーカイブ班の論文、報告、研究ノートによる特集を組むことができた。この段階での中間的な成果を公表することによって、残された課題に向かってさらに研究の深化を図ることができると思う。

本研究紀要をお読みいただければわかるように、先端社会研究所には、社会学、文化人類学の研究者以外にも、経済学、経営学、比較文化、民俗学、観光学、地域研究、哲学、理工学、情報学に至る幅広い領域の学内外の専門家、研究者が参画している。研究者だけでなく、その地域の企業やNPOなど、実際に社会のなかで活動し、そこでの課題に直面して、それをより良い方向に改革しようと日々努力されている人々と密接な連携をとって活動している。

また、教育活動のページに示したように、初めてメルボルン大学アジアインスティテュートに本学の大学院生を派遣し、英語での報告をさせることができたことも、今年度の大きな成果であった。

これらの研究成果を、さらに全学の大学院研究科の教育に直接連動させていく企画を、今年度、鈴木副所長が提案し、そのもとで来年度に向けては「院生企画による研究会」「英語で社会学」「メルボルン大学での大学院生交流」などで、先端社会研究所の研究がより大学院教育の一部ともなるようにつとめたいと思う。

丁寧論文査読にあたっていただいた先生方、編集を担当していただいた村島専任研究員に心から感謝し、読者諸氏のご批判、ご高評を期待している。

2018年3月

関西学院大学先端社会研究所
所 長 奥 野 卓 司